2年B組の火急

榛原 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２年Ｂ組の火急

【Ｎコード】
Ｎ４２４１Ｍ

【作者名】
榛原　藍

【あらすじ】
生徒会の一存シリーズ中の２年Ｂ組シリーズ第三弾。
杉崎鍵、謹慎処分

（前書き）

お待たせしました。

碧陽学園生徒会。俺、杉崎鍵が所属する生徒のトップたる集団である。しかし、その実態は、微妙なところだ。いや、俺としてはもう充分。美少女だらけのコミュニティにヨダレが止まらないような、健全な成人男子としては喉から手が出るほどの素晴らしい環境だ。しかしまあ、『生徒のトップ』だとか、『学校のリーダー格』という表現は正しくない。

まず、生徒会長である桜野くりむ――――俺は基本的に会長と呼んでいる――――は、思考そのものが子供なのだ。いや、ふざけてそうなら別にいいんだ。それが地だから困ってるんだ。こないだ近くの公園で4～5歳の子供達と一緒に砂場でトンネルを作っていた姿は、多分、半永久的に忘れられない。真面目なのはわかるが、真面目に不真面目といったところか？いや、多分自覚はないんだろう。精一杯やっているつもりなんだろう。

次に、書記である紅葉知弦――――俺は基本的に知弦さんと呼んでいる――――は、いやもう、彼女こそ生徒会長だろうって貫禄だ。いろいろと、うん、俺を刺激してくるわけだけど、それを差し引いても、彼女の頭脳は生徒会長職に相応しい。でもまあ、彼女が会長になることで、毎日鞭を持った女生徒が俺を叩きに来る光景は、いくらフェミニストを自負する俺でも避けて通りたいビジョンだ。

次、会計である椎名真冬――――俺は基本的に真冬ちゃんと呼んでいる――――は、・・・・うん、とにかく、彼女も生徒会の拮抗を崩すバランスブレイカー。俺の精神領域に何度踏み込み、踏み荒らし、破壊したものか。思い出すだけでも・・・いや、言うまい。最近ではあの中目黒のメアドを手に入れて目を輝かせていた。「憧れの先輩のメアドゲット！ひゃっほぅ！」って感じじゃなかった。今まで以上に戸締まりを確認しておかなければ・・・。

そして、俺の同級生であり、副会長の椎名深夏――――俺は基本的

に深夏と呼んでいる―――は、とにかく思考がアレだ。なんというか、昭和だ。ウ〇トラマンを見始めた世代みたいな思考だ。基本的にツッコミに回ることが多いから、常識人と思われがちだが、やっぱりこいつも変なキャラだ・・・。

と、自慢のハーレムメンバーの分析をしながら、俺は教室の自分の机に突っ伏していた。周りには誰も居ない。教室には、やや朱色を帯びた暖かな光が、カーテンの隙間から注いでいる。

俺、杉崎鍵は。

生徒会長から直々に。

謹慎処分を言い渡されました。

・・・・マジです。

遡ること二十分前、いつものように生徒会室を訪れた俺は、ピンクのアホ毛を立たせた小っちゃい先輩に、『最近、物語がマンネリ気味だから、杉崎三日日間来ないで！』と、まるで筋の通ってない理不尽な命令をされ、今に至る。

「・・・なんで」

本日9回目の呟き。ここだけくり抜いたら、自分を守って死んだはずの親友が敵として現れた瞬間みたいに聞こえるだろうが、あんなシリアスな感じじゃない。いや、俺自身としてはかなりシリアスなんだけれども。

なぜ、ハーレム王が配下の女に出てけと言われなくちゃならないんだ？新ジャンルの開拓なんかするつもりはさらさらないぞ、俺。とはいうものの、命令は命令だ。逆らえば好感度が下がることを踏まえると、ここはおとなしく従ったほうがいい。エロゲ、ギャルゲ

にも言えることだが、どんなにイライラしてもフェミニストとしてのプライドを棄ててはいけないのだ。

「あっ、杉崎。ぐ、偶然ねぇ！」

「出て行け」

突如現れた巡に、俺は低いトーンで言い放った。

「な、何よ！この私が話しかけてんのよ！もっと嬉しそうにしなさいよ！」

「・・・・・・」

「苦い顔するなっ！」

それもそのはず、俺は獲れたての魚の内臓を無理やり喰わされたような苦い顔を、巡に向けていた。

「・・・用件はなんだ言ったら帰れ」

「句読点くらい使いなさいよ！なにその早口！」

「すももッももむものうち」

「噛みすぎ！」

「うるさいな、俺今ブルーなんだ。悪いが構ってやれん」

俺は巡から視線をはずして、カーテンに阻まれて見えもしない町並みを見た。

「そ、そう。ブルーなんだ・・・。そっかそっか、生徒会に弾かれたのね？いいわ、そんな傷心の杉崎のために、私が・・・」

「うーん！いい天気だっ！今日も仕事するぞっ！」

「立ち直りはやっ！」

身の危険を感じた俺は、人間の視覚を超越した速さで教室を後にした。

「まったく巡のやつめ、俺の安息の地を奪うとは、わけわからんな。仕方ない、生徒会室にも行けないんじゃ、放課後は不毛だ、帰「あ

～ら、杉崎鍵ではございませんこと？」晩、飯どうするか・・・奮発してカツカレー弁当でも買って行こうか」
「無視するのではありませんわっ！」
どうやら選択肢を間違えたようだ。ここは『無視』ではなく『逃亡』を選択するべきだった。
「リリシアさん。俺に抱かれに来たんですか？」
「このシチュエーションでよくそんな解釈ができますわね！」
「では、俺に口説かれに来たんですね」
「違いますわっ！せめて疑問形を使いなさい、疑問形を！」
「今日の下着の色はなんですか？」
「k・・・って、違いますわ！危うく言いそうになったではありませんか！」
「黒ですか。ませてますね。お似合いだと思いますけど」
「なっ・・・そんなことはどうでもいいのですわ！生徒会はもう始まっているはずなのにも関わらず、ぶらぶらと靴箱に向かっている！ズバリ！あなたクビにされましたわねっ！？」
「嫌だなぁ、クビになんてされてませんよ、謹慎処分です」
「では、謹慎処分になるほどのことをしたんですわね？なんです？白状したほうがよろしくてよ？」
「会長の駄々です」
「・・・なるほど」
なんか急に静かになった。やっぱり会長の性格は良く分かってるらしい。その隙に俺は陸上生物の極みたるスピードでその場を後にした。
「ったく、どこで何やってても面倒な学園だな・・・さっさと帰ろう」
ようやく靴箱まで辿り着いた俺。ああ、ようやくここから帰・・・。
「おっ、杉崎じゃねぇか」

「氏ね」
「んだよいきなり！ネットユーザ特有の誤変換しやがって！」
「守君、うるさいです。個人情報ばら撒きますよ」
「なんで！？声かけただけでなんでそんな大事件になりつつあるの！？」
「こないだ小便漏らしたこととかな」
「そういうタイプの個人情報なんだ！でもお前事実無根の情報改竄してんじゃねぇよ！」
「１６年前に」
「事実だった！別に普通のことだった！」
「熱海で」
「場所まで正確に！」
「宇宙守が」
「ああ！あれか！小学校とかで時間場所人物行動担当決めて、適当な言葉言って繋げて変な文章ができるっていう、あれか！」
「女湯に」
「女湯！？１６年前だろ！？赤ちゃんだろ！？普通だろ！？」
「監視カメラを仕掛けました」
「赤ん坊のくせにっ！」
「・・・最低だなお前」
「人の経歴かき回すてめぇのほうが最低だっ！」
守が怒鳴って、ひと段落ついた。
「悪いが守、ぶっちゃけ俺、今急いでんだ。帰らせてくれ」
「最初からそう言えよ・・・あれ？お前、生徒会は？もう時間過ぎてんじゃ・・・」
守が振り返る頃には、俺はもう校舎を出ていた。つーか、その説明してたらまた時間食うし。思い出したくないし。
「・・・さて！家に帰ったらどうしようかな！今日はバイトもないし！久しぶりにあんなイベントやそんなイベントを拝見しようか！」

ずーんと沈んだ気持ちを高ぶらせようと、俺はわざわざ大きな声で、叫ぶように独り言。・・・虚しい。とはいえ、たまにはこういうのも悪くないだろう。早く帰れると言うことは、普段出来ないことができるというわけで・・・。
「おう、どうした杉崎。もう生徒会は始まっているぞ？」
校門に差し掛かったところで、アンパンを頬張る魔王に遭遇した。

魔王の『威圧』！スギサキは身動きが取れなくなった！

「わかってます」
「ではなぜ行かない？ハーレム狂のお前が自ら仮想ハーレムし放題エリアを離れる等、ヤ○チャがブ○リーを一撃で倒すくらい信じられんな」
「すっげぇ信じられませんね！」
相当信じられないようだった。とことん微妙なヤム○ャと、原作者曰く最強のブロ○ーを一撃で倒す等、マジでありえない。
「まあ、そんなことはいい」
アンタが引っ張ってきた話題だろうに。
「さっきも言ったが、なぜ行かない？」
魔王・・・真儀瑠先生が、いくらか真面目な声質になった。なので。
「ちょっと会長命令でして・・・三日間、謹慎です。好感度下げたくないし、おとなしく・・・」
「そうか。ならば行こう」
「アンタ話聞いてたのかぁあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
俺は絶叫した。それすらも全然耳に入れていないようで、先生は俺の襟首を掴むと、ずるずると俺を引きずっていく。
「ちょっと！無視しないでくださいよ！なんだっていつも・・・」
「私の　趣味は　嫌がらせ　だからだ」
「出た！英訳口調！」

「そして　杉崎が　桜野に　嫌われて　ほしいからだ」
「つくづく最低ですね！」
いつの間にやら、俺は上靴に履き替えていて、生徒会室の前にやってきた。
（いや・・・大丈夫だ。理由さえいえば、好感度下落は避けられる・・・。って、真面目に考えすぎか俺。大丈夫、だいじょ・・・）
「入るぞ」
「心の準備させろぉおぉぉおお！！」
絶叫虚しく、先生はなんの躊躇いもなく扉を開けていた。

いつもと変わらない風景・・・かと思いきや。
「あっ！杉崎！遅いよ！」
「はい？」
俺は思わず聞き返した。そりゃそうだろう。誰が原因でこうなったのか。
「良かったわ、帰ってきて。深夏が、もう寂しそうで寂しそうで不憫だったのよ」
「なっ・・・何言ってんだよ知弦さん！あたしが鍵一人居ないからって動揺するはず・・・」
そういう深夏は、なんか顔が赤い。俺のいない生徒会室で何があったんだろう。
「先輩がいなくて、みんな寂しかったんですよ！お姉ちゃんなんか特に、先輩の席に目を配っていたり、先輩が居ると思って無意識に話しかけたり・・・」
「真冬っ！お前までっ！」
・・・なんだそれ。この前の俺じゃないか。
「・・・ま、まあ、あれだ。お前がいないと、あたしを含め、生徒会全体のペースが狂う！・・・だから、会議しようぜ」
目線を逸らしながら深夏が言う。・・・なんか良くわからんが、今日も生徒会に参加できるようだ。

「・・・そっか。ふふふふ、それでは始めますかっ！今日も元気に！俺のハーレムをっ！」

「杉崎、もう来なくて良いよ」

「解雇されたっ！？」

解雇、言い渡されましたが。

今日も碧陽学園生徒会、まったりのんびり過ごしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4241m/

2年B組の火急

2010年10月8日13時48分発行